OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ

September.2022
No.62

自然と文化が調和する横浜・金沢文庫キャンパス。
中庭のある校舎、風薫る桜並木、開放感あふれる環境です。
野球場、ラグビー場、陸上競技場など本格的なスポーツ施設が点在。
キャンパス機能再編により、まもなく修学地としての役目を終え、
2023年度以降は主にスポーツの拠点として活用されていきます。

思い出深い金沢文庫から金沢八景へ
新たな環境で幅広い交流と連携を目指す
関東学院大学国際文化学部と社会学部

関東学院大学の横浜・金沢文庫キャンパスは1986年に開設。閑静な住宅街に囲まれた緑あふれる敷地に教育棟や講堂、本格的なスポーツ施設を有し、国際文化学部と社会学部の学生達が学んできました。2023年4月、キャンパスの機能再編に伴い、両学部は横浜・金沢八景キャンパスに移転します。移転を半年後に控え、それぞれの学部長にキャンパスでの思い出や今後の展望をお聞きしました。

※文中では、横浜・金沢文庫キャンパスを「文庫キャンパス」、横浜・金沢八景キャンパスを「八景キャンパス」と表記します。

多面的・多角的な視点を活かし他分野との協働に期待

私が学生時代を過ごした場所は、文庫キャンパスと同じように中庭がある回廊造りの校舎でした。どこか馴染み深い、全てが一つの校舎の中にコンパクトに収まり、学生がどこにいても目が行き渡るこのキャンパスは、勉強をする意味でも、研究をする意味でも良い環境だと思います。八景キャンパスに移ることは寂しくもありますが、様々な学部の教員や学生と交わる機会が増えるので、楽しみのほうが大きいですね。文庫キャンパスは適度にまとまっていて連帯感があるのは良いのですが、その反面、他学部との交流が少なく、学びや活動が小さな範囲で完結しがちです。今後は学部学科の垣根を超えた学びの機会を積極的に作っていきたいですし、例えば建築・環境学部等と協働して多様な文化的背景を持つ人々が個性を発揮するまちづくりを考えるなど、本学部とは異なる視点や発想を持つ学部との交流を楽しみにしています。

関東学院大学は社会のために貢献できるような人材を育む教育を進めていますが、社会課題の観察や分析、解決へのアプローチは、ディシプリン（学問分野、専門性）によって異なります。複雑化している地球上の課題は、特定分野の知見だけで解決できるものではなく、例えば仮説検証型のアプローチだけで解決へと進むと、社会に新たな歪みが生じてしまうこともあり得るでしょう。国際文化学部はこの大学で唯一の人文科学系の学部です。人文科学の武器は、物事を多面的・多角的かつクリティカルにとらえ、考察する力です。様々な視点を持つ人が集う学びや協働の中で、多文化共生を掲げる国際文化学部の強みを発揮していきたいと思います。

全学的なグローバル化のロールモデルとなる学生を育成

2023年度から、卒業単位の60%以上を英語による授業で修得できる英語文化学科の新たなプログラム「GAP（グローバル・アウェアネス・プログラム）」が始まります。英語は国際共通語であり、世界で生きていくための教養です。GAPでは、留学支援、英語で行うゼミナール「イングリッシュセミナー」、英語で専門を学ぶCLIL（内容言語統合型学習）科目などを通じて、地球規模の視野で課題をとらえ、グローバル社会で協働できるスキルを持った人材を育成します。

国際文化学部としては、学生が英語や「やさしい日本語」を含む多様な言語でネイティブの教員や留学生、地域の方々と交流する姿を八景キャンパスの日常風景にしていきたいです。また、学生が国際交流・多文化交流の象徴として学内外で活躍してくれることを期待しています。

関東学院大学は本年度、キリスト教人間学の分野でインスティテュート（特定のテーマで設置される学部横断的な教育プログラム）を開設しましたが、近い将来の開設に向けた「グローバル・インスティテュート」の構想も始まっています。全学的に協働し、様々な考え方やアプローチで地球規模の課題の解決に向かっていきたいですし、国際文化学部の学生が核になりながら本学のグローバル化を引っ張っていければと思います。

関東学院大学 国際文化学部 学部長
吉田 広毅
国際基督教大学大学院教育学研究科
博士前期課程修了
2017年関東学院大学に着任
国際文化学部英語文化学科教授
（協調学習、自律的学習、
動機付け理論を基にした英語科教育）

地域や学内で連携を深めフィールドワークを強化

関東学院大学に着任して以来20年、この文庫キャンパスで教壇に立ってきました。ここは見ての通り、建物が小さく可愛らしい印象のキャンパスで、研究室と教室が同じ建物にあるため、学生が研究室にふらっと現れたり、廊下で顔を合わせたりなど、学生と近い関係が築ける点が気に入っています。また、春になると正門から研究室棟へ続く桜並木がとてもきれいで、それが見られなくなるのは少し残念に感じますね。

一方で今の学生達は、コロナ禍でこの2、3年、キャンパスライフをあまり送れていなかったせいか、名残惜しさよりも新天地に行けることを楽しみにしているように思います。むしろ卒業生のほうが寂しがっているかもしれませんね。先日、私のゼミ1期生と会ったのですが、移転を知って「最後に一度、妻と子どもと一緒に文庫キャンパスを見ておきたい」と話していました。実は文庫キャンパス全体で、「ホームカミングデー」というこれまでに卒業した学生や退職した教員らを集めて親睦を深める趣旨の催しの企画を現在進めています。今後の状況にもよりますが、ぜひ実現したいと思っています。

社会学部では、学生が外に出て行って現地の人と話し合い、現場の空気を肌で感じながら課題解決策を探る「フィールドワーク」を重視しています。これまで先生方の努力によって地域の方々と良い連携を築いてきました。移転後もその連携を大切にしながら、新たな環境でさらにフィールドを広げていくつもりです。

学生達も八景キャンパスに行けば、これまで以上に他の学生の動きがダイレクトに伝わってくるでしょうから、研究や就職活動の面で多くの刺激を受けられると思います。例えば社会福祉系のコースの学生であれば、看護学部の学生と連携を取ることで「人を支えるとはどういうことなのか」を多面的に捉える機会が得られるのではないでしょうか。

長期的視野に立った学部横断型プロジェクトを推進

学内には社会学部と同様、まちづくりに取り組んでいるゼミナールが多々あると思います。実際に商店街活性化や古民家を再生してカフェやケアワークの施設として活用するなど、ダイナミックな動きをしているプログラムがあると聞いています。社会学部もそうしたプログラムに参加させていただいたり、分野にとらわれない学部横断的なプロジェクトを立ち上げて、長いスパンで地域の人を巻き込んだ活動をしていきたいと考えています。

社会学部ではここ数年、若い先生がどんどん入り、意欲満々に活動に取り組んでいます。私としてはそれを後押しするとともに、八景での取り組みを社会学部が飲み込んでいくくらいの意気込みを期待しています。また、社会学部は経済学部の研究室棟に移転し、二つの学部の研究室が混在して設置されるとのことなので、経済学部の先生方との交流が自然と深まるでしょうし、それによって何が起こるのかを今から楽しみにしています。

関東学院大学 社会学部 学部長
細田 聡
北海道大学大学院文学研究科行動科学専攻
博士後期課程修了
2002年関東学院大学に着任
社会学部現代社会学科教授
（認知心理学、産業心理学）

未来を主体的に生きる力の「素」を育む 魅力ある学校作りと「六浦ベルト」の具現化

関東学院六浦小学校は、松田和憲学院長が校長を兼任していましたが、本年4月、黒畑勝男新校長が就任されました。任期は4年間です。関東学院六浦中学校・高等学校校長との兼任で、六浦を拠点とする小・中・高から大学へつながる「六浦ベルト」の活性化も期待されます。

短期間で高度ICT化と個別最適化を目指す

関東学院六浦中学校・高等学校を含め、これまで中等教育4校で学校作りと教育改革を経験してきました。初等教育は六浦小学校が初めてですが、共通して言えることは、学校を成長させ前進させるのは「時間と決断の勝負」だということです。そのことを先生方には理解していただきたいですし、傍観者でも、批評家でもなく、実践者へのマインドリセットを期待しています。

六浦小の課題は何よりも在籍者数の回復です。社会全体の少子化の進行、地域における少子化の激進は避けられない問題です。しかし、それだけを原因として教育内容について考察する意識がないままでは未来はありません。周辺地域からはもちろん、横浜の南端というロケーションでも入学させたい魅力ある学校になるために、何を変えていくのかを考えるべきです。コロナ禍により少子化はますます加速し、2021年の出生数の激減は、7年後の私立小学校の入学児童数に確実に影響します。もはや待ったなしの状況です。他校との差別化を数年以内に明確にできるよう「教育フレームの先進化」と「わかりやすいPR」に取り組んでいきます。

短期間での「高度ICT化」を図ります。学び方の改革として、授業での必然的な活用を進めます。併せてAI教材を積極的に活用して「学びの個別最適化」を目指します。そして六浦小の伝統教育である新聞制作と、ICT環境を活用した「六浦小モデル」を推進します。それらを分かりやすくPRしていきます。さらに中高、大学へとつながる「六浦ベルト」を言葉だけのものではなく、また単なる系列校での接続連携でもなく、教育フレームでの内実のある連携として一刻も早く、具体的に実現したいと思います。

小学校教育における気づきの学習の重要性

15年後、児童は社会に出ていきます。大きく変化する時代に生きていく力を育てることが教育の役割です。中でも小学校は、主体的に考える力、想像する力、協働する力の「素」を育むことが大切です。もちろん基本的な知識や技能の習得は必要です。しかし、定形的な学びでの習得の度合いや正確さだけを求める学び方、考える過程を省略する教育、創造的に考えることを抑制するような学習のあり方に陥ってはいけません。新たなモノとの出会いから「気づき」を得て、学びの動機につなげ、自己啓発力を育むことが小学校での教育に必要な観点です。そのことが近未来の社会で主体的に生きる力につながります。

六浦小が掲げる「〈のびる〉を伸ばす」というスローガンはそういう意味であり、今後はICT化によりさらに合理的に発展するでしょう。今秋には一人1台、タブレット端末を使える環境を整えます。先生方の研修も既に始まり、授業や業務での活用が徐々に始まっています。

新聞教育とICT活用で「六浦小モデル」を推進

65年以上の歴史を持つ新聞教育は、本校の宝です。神奈川県を中心とした有志の私立小学校による「まめ記者講習会」が55年以上も続いていますが、本校がリーダー的役割を果たしています。今後も全学年の授業で新聞制作に取り組み、探究心と確かな日本語運用力を育成し、その力を本校独自の学びのシステム「六浦小モデル」に活かしていきます。

「六浦小モデル」のうち、児童自身が習熟度を意識して学ぶ選択型授業や複線型授業「私のパレット」では、ICTの活用とAI教材の導入により「個別最適化」を図ります。ICTを利用して基礎学力をつける学習は、近隣の公立校でも導入が進んでおり、それは本校でも早急に取り組むべき課題です。

児童自らが決めたテーマを1年かけて追求する「私のポケット」では、個々の探究を記録として残したり、プレゼンテーション力を高めるためにICTを活用していきます。

さらに来年度を目標にベトナムなど海外の小学校とオンラインで結んで、多面的な国際交流を行っていくつもりです。

単位認定制度を導入し骨太な六浦ベルトを構築

AI時代の到来により、情報技術者やプログラミングの知識を持つ人材の需要が増しており、多くの大学でデータサイエンス系のコース設置が進んでいます。六浦小も授業でプログラミングの初歩に触れていますが、中学では今夏、希望者を対象にコンピュータ言語のジャバスクリプトの集中講座を開講しました。来年は高校生向けに、AIや言語のパイソン講座などを開講します。将来的には、小中高大での連携講座を「六浦ベルト」の特長として展開したいですね。特に高大連携で実現したいのは、高校在学中に大学のデータサイエンス科目の講義を受講でき、併せて単位も認定されるようになる、ということです。大学進学の動機にもなりますし、高校生にとっては入学後の大きなアドバンテージとなります。大学の先生方との単発的な連携ではなく、本当の意味で高大連携が太いパイプとして結ばれるよう、大学にもご協力をいただき、何としても実現したいと思っています。また、連携での低学齢への延長として六浦小学校へ、大学に監修していただくプログラミング教育の導入も視野にあります。それが小中高大の「六浦ベルト」の特長。未来に必要な力を一貫で育成。情報一貫教育の設置。これが総合学園、関東学院の一つの特色となれば素晴らしいと思っています。

日本の教育は内向きだと、私は長年言い続けてきました。日本では人口減少に伴い、今後ますます外国人の登用が増え、国内のグローバル化とフラット化が進むでしょう。にもかかわらず、日本は国際人材養成の観点での教育力が依然として低く、このままでは日本の子ども達は取り残されるばかりです。近未来社会で活躍できる人を育成するには、かつての暗記中心の学習成果のみを学力と見なすような学び方ではなく、創造的かつ主体的な学びが必要であることを、私達は改めて認識しなくてはなりません。その上で、私学に求められる先進的な教育を追求し、選ばれる学校として存在感を高めていきたいと思います。

1956年創刊の「こどもかんらん」。
2022年7月現在で647号を数える

関東学院六浦小学校 校長（関東学院六浦中学校・高等学校 校長兼任）
黒畑 勝男
1983年 北海道立高等学校（英語科専任教諭）
1997年 立命館慶祥中学校・高等学校（教頭）
2007年 酪農学園とわの森三愛高等学校（副校長）
2014年 関東学院六浦中学校・高等学校に校長として着任
2022年4月 関東学院六浦小学校長を兼任

 写真撮影時のみマスクを外しています。

関東学院大学社会学部のゼミナールが小学校と連携して食品ロスを学ぶ交流会を開催

社会でのつながりが希薄化しているコロナ禍において地域の児童と交流を深め、食品ロスへの問題意識を高めるプロジェクトをやり遂げた学生達の活動を紹介します。

食品ロス削減の輪を広げて地域活性化につなげたい

今年3月8日、関東学院大学社会学部の小山弘美准教授ゼミナールの学生達(当時3年生)が、横浜市金沢区の西金沢学園小学部で「食品ロス」について学ぶ地域連携交流会を実施しました。小山ゼミナールの研究テーマは「まちづくり」です。昨年度は金沢区釜利谷地区をフィールドに、14人の学生が3つのグループに分かれて研究活動を実施。その中の「食品ロス」を研究するグループの学生5人を中心に交流会を企画しました。

食品ロスとは、食べられるにもかかわらず廃棄されてしまう食品のことで、資源の無駄使いや環境への負荷、処分にかかる莫大なコストが問題となっています。学生達はまず、消費期限や規格外を理由に廃棄される食品を企業から集めて支援を必要とする人達に届ける「フードバンク団体」への聞き取り調査を実施しました。また、各家庭で余った食品を回収して福祉施設等に寄贈する「フードドライブ活動」について、もっと地域の人達に知ってもらおうと「フードドライブ回収マップ」を作成。近隣の自治会での回覧や、SDGs教育に力を入れている西金沢学園小学部と中学部の全生徒への配布を行いました。今回の交流会は、この取り組みの一環として実施されました。

きっかけは、ゼミ長である内田悠登さんの食品ロス研究に対する熱意でした。「僕は大学のAO入試で、食品ロスとフードシェアリングに関するプレゼンテーションを行った経験があります。ゼミナールで食品ロスと地域活性化を結びつけられないかと考え、研究テーマとして提案しました」

プロジェクトリーダーを務めた吉村洋起さんは、子どもが関心を持つことで、親にも影響を与えられるのではないかと語ります。「横浜市の小学校では給食を通じて食育を行っています。だから食品ロスの問題を身近に感じてくれるのではないかと考え、自分達が学んだことを伝えようと思いました」

クイズやスライドショーで楽しく学ぶプログラム

交流会には小学5年生の児童約90名が参加しました。前半は体育館でスライドを投影して食品ロスを楽しく学ぶレクチャーやクイズを実施。吉村さんは司会進行、内田さんはパソコン操作と進行補佐を務めました。クイズを担当したのは内藤裕太さんです。

「クイズはやはり正解した方が楽しいので、考えれば答えを導き出せるような出題や、二択問題では紅白帽子を被って解答してもらうなど楽しめる工夫をしました。また、クイズ番組の効果音を使ったり、クラス対抗戦にしたことでとても盛り上がりました。僕は教員志望なので、今回の交流は勉強になることばかりでした」

小山先生(前列中央)とゼミナール生

子ども達の自由な発想が飛び交ったワークショップ

後半は教室に移動し、「どうすれば食品ロスを解決できるか」などを考えるワークショップを実施。小山ゼミナールの学生達がファシリテーターとして参加し、児童達は自ら考えた解決策やアイデアを付箋に書き、模造紙にまとめて発表しました。教室内のセッティングや準備を担当したのは瀧澤真南さん(取材日は就職活動のため不在)とサク・エツゲンさんです。中国人留学生のサクさんは、交流会に先立って配布したフードドライブ回収マップの作成者でもあります。「パソコンは得意ですが、チラシ(マップ)を作るのは初めてだったので、インターネットで調べながら制作しました。交流会では、外国人の私が小学生とコミュニケーションが取れるだろうかと最初は緊張しましたが、どんな質問に対してもちゃんと自分の答えを述べてくれて、日本の小学生は発想力がすごいなと感心しました」

食べ残しをなくすアイデアには、「推しのアーティストを想像しながら残さずに食べる」「ユーチューバーの大食い企画を観ながら給食を食べれば食欲が湧くかも」など予想だにしない自由な発想が飛び出す一方、「親が作ったご飯しか美味しくない。給食が嫌い」という児童もいたそうです。今回をきっかけに食品ロスについて自分なりに考え、食べ残しを減らす努力につながればと小山先生や学生達は語っていました。

児童はもちろん、先生方にも大好評だった交流会。吉村さんは「伝える側の僕達にとっても、新たな発見や学びがありました。個人的には人前で話すことが苦手なので、大勢の前で司会進行にチャレンジできたことは良い経験になりました」と振り返ります。

指導教員の小山先生も学生達の成長を実感しています。「コロナ禍の影響で一度は延期になり、オンライン開催も検討するなど、紆余曲折ありましたが学生達は慌てずにしっかり準備してくれました。校長先生をはじめ西金沢学園の方々が全面的に協力してくださったことに何より感謝しています」

吉村洋起さん

内藤裕太さん

内田悠登さん

近隣に配布したフードドライブ回収マップ

サク・エツゲンさん

後輩達に受け継がれたチャレンジ精神

今回の取り組みは、横浜市金沢区と関東学院大学、横浜市立大学の連携事業である「キャンパスタウン金沢」の助成を受けています。小山准教授は次のように語ります。

「助成金を受けるには申請手続きや区とのやり取りなど大変なことが多く、一時はやめようという空気になったのですが、その時にゼミ長の内田くんが自分一人でもやると宣言したことで、皆がまとまっていきました。あの一言がなかったら、ここまではできなかったと思います」

小山ゼミナールでは今年度の3年生も、別の研究で助成を申請しています。先輩の姿を見て、大変だとしても自分達もやりたいという気持ちにつながったからです。何事も最初の一歩目はとても重要だと言う小山准教授。今回の経験はゼミナール全体にとって大きな一歩となりました。これからもまちづくりの視点から、地域とともに学生が成長していく社会学部の活動に期待したいと思います。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

 写真撮影時のみマスクを外しています。

ロゲイニングを活かしたまちづくりのアイデアで関東学院高等学校のチームが「みらい甲子園」最優秀賞

社会課題を解決するアクションプランを競う大会で高齢者や障がい者の疑似体験とまちあるきを組み合わせたイベントを提案した高校生達の活動を紹介します。

ロゲイニングを活用してSDGsを達成

高校生がSDGsを起点として社会課題解決に向けたアイデアを発表する「SDGs Questみらい甲子園」首都圏大会で、関東学院高等学校の生徒が提案したアクションプランが最優秀賞を受賞しました。2021年度は全国6エリアで開催され、そのうち首都圏大会は東京・千葉・埼玉・神奈川の高校生が対象です。今年3月26日に都内で開催されたファイナルセレモニーは、オンラインで同時配信され、応募総数196チームから選ばれた12チームによる発表と表彰が行われました。

最優秀賞に輝いたプラン名は「一枚の地図から新たな気づきを―ロゲイニングを活かしたまちづくり―」。提案したのは関東学院高等学校1年(当時)の高川陽菜さん、黒田百合美さん、漆原優希さん、澁谷望さんによるチーム「ヨコハマ探検隊」です。

ロゲイニングとは、点数が割り振られたチェックポイントを、地図を見て制限時間内にできるだけ多く巡って合計得点を競うスポーツです。ヨコハマ探検隊の4人はロゲイニングを応用して、高齢者や障がい者の疑似体験ができるイベントを提案。参加者の当事者意識を醸成するとともに、施設や街の改善点を見つけて自治体等に提案し、誰もが快適に暮らせるまちづくりにつなげたいと訴えました。

ロゲイニングマップを作成する高1授業の様子

プレゼン資料を作成するヨコハマ探検隊

デザインセンターでプレ発表 最後は196チームの頂点に

関東学院高等学校からは、みらい甲子園に14人の生徒が参加を表明。3チームに分かれ、SDGsの視点からロゲイニングを活用した地域活性化を企画しました。そのうちの1チームが今回受賞したヨコハマ探検隊です。

3チームはみらい甲子園に応募する直前に、ヨコハマSDGsデザインセンターを訪れ、自分達の企画を発表してアドバイスをもらい、ブラッシュアップを図りました。11月の授業からわずか1ヶ月後のことです。黒田さんは「障がい者と高齢者の疑似体験と、ロゲイニングを組み合わせたイベントを提案して、お褒めの言葉とともに、ターゲットの設定や発表の仕方についてフィードバックをいただき、企画を練り直しました」と話します。

ヨコハマ探検隊は書類選考による一次審査を通過し、二次審査のために5分間のプレゼンテーション動画を作成して提出。ファイナルセレモニーには黒田さんと漆原さんの二人が参加し、最優秀賞が発表された時は本当に驚いたそうです。審査員からは、ロゲイニングを通じた疑似体験により、SDGsの本質の一つである「他者の目線」に立って考えるきっかけとなること、ゲームとして楽しみながらまちづくりに向けて話し合える点など、プランの革新性や実現度が高く評価されるとともに、今後の展開へ期待が寄せられました。

SDGs デザインセンターの方々とのディスカッション

ヨコハマ SDGs デザインセンターでの発表の様子

多様性と共生をテーマに授業で横浜のマップを作成

きっかけとなったのは、授業でロゲイニングを体験したことです。昨年11月、高1の授業「総合的な探究の時間」では、「多様性と共生」をテーマに、3日間かけてロゲイニングマップを作成しました。生徒達はSDGsについて学んだ上で、桜木町、石川町、みなとみらい、横浜駅周辺、日ノ出町、関内の横浜の市街地6エリアを実際に歩き、多様性と共生のテーマに沿ったチェックポイントを探しました。高齢者や障がい者の視点に立ち、点字ブロック、音声案内付き信号機、車椅子対応の電話ボックス、多言語の案内板など、発見した全105か所のチェックポイントにコメントと得点をつけて地図データに反映し、ロゲイニングマップを完成しました。

この授業を通じて、4人は今まで見過ごしていたことがいかに多かったかを実感したと言います。高川さんは「点字ブロックや音声が流れる信号機など、今までは気にせずに街を歩いていましたが、SDGsについて学び、それを必要としている人の視点に立ってみたところすごく便利であることがわかりました」と語り、澁谷さんも「駅の階段の曲がり角に設置された衝突防止の鏡など、障がいのある人に限らず、自分達にとっても住みやすい工夫がされていることに気づきました」と話します。

授業はここで終わりましたが、楽しみながら気づきを得られるロゲイニングの可能性に目覚めた生徒達は、これを何かに活かせないかと考えました。漆原さんは次のように振り返ります。「コロナ禍の影響で修学旅行が中止になったこともあり、3日間、ロゲイニングができて楽しかったです。外国人が多い横浜中華街では小銭の使い方を絵で説明した自動販売機や、みなとみらいには子ども連れやバリアフリーに対応した設備が多いなど、場所によって設備に違いがあることに気づきました。これで終わらせたくないなと思っていたところ、先生からみらい甲子園の話を聞き参加を決めました」

小さなきっかけが人と世界を変える力に

今回の活動を通じて生徒達は様々な気づきや変化があったと言います。

「僕は正直SDGsについてそれまで真剣に考えたことがありませんでしたが、今は困っている人がいたら積極的に声を掛けるようにしています」(澁谷さん)

「皆が相手の立場に立って考えられるようになれば、良い社会になるのかなと思うようになりました」(黒田さん)

「いろいろな経験ができ、人前に立っても緊張せず伝えたいことを伝えられるようになりました」(漆原さん)

「年齢や障がいの有無を問わず、誰もが住み続けられる街や社会を皆で目指していきたいと思いました」(高川さん)

一つのきっかけから、大きな成長を遂げた4人。大会に参加した全ての高校生達が、未来の主役として活躍してくれることを願うとともに、社会課題を自分事として捉え、生徒による自主的・創造的な活動を推進する同校の取り組みに今後も注目したいと思います。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

関東学院高等学校 2年　ヨコハマ探検隊
漆原 優希さん　澁谷 望さん
高川 陽菜さん　黒田 百合美さん

写真撮影時のみマスクを外しています。

ガバナンス改革や働きやすい環境作りを推進

学校法人関東学院の常務理事（法務・労務・内部監査担当）に関東学院大学法学部法学科の河村好彦教授が就任されました。

法的観点から運営をサポート

今年4月より常務理事に就任し、法務・労務・内部監査を担当しています。学校法人は様々な規程のもとに学校を運営しています。社会の流れや法令改正等を受け、学内の規程を改正する必要が生じた場合、法的な観点から意見を述べたり、文書の確認等を行うことが基本的な業務です。最近の事例で言うと、育児・介護休業法の改正があります。これまで有期雇用労働者は雇用期間が1年以上経過していないと育児・介護休業が取得できませんでしたが、緩和により1年未満でも取得可能となりました。それに伴い、学内の就業規則の見直し案を検討するなど、労務環境改善にも携わっています。

他にも契約書や申請書類の確認、企画等に関する相談、内部監査業務、さらにトラブル対応など様々な事柄を法的にサポートしています。時には予想もしない案件が突発的に発生することもありますが、職員の方々のお力を借りながら柔軟に対応していきたいですし、多くの人と話し合い、教職員の方々にとって気持ち良く働きやすい環境作りに貢献できればと思います。

私立学校法改正の動向

学校法人のガバナンス（組織統治）改革に向け、私立学校法改正への動きが活発化しています。学院としてもガバナンス強化とともに、寄附行為や細則の改正等を進めていく必要があります。寄附行為というのは耳慣れない言葉だと思いますが、学校法人の根本規則をまとめた文書のことです。企業でいう定款に相当するもので、私学ではそれを寄附行為と呼んでいます。

私学は元々、理念を共有する人達が集まり、教育のために寄附財産を提供して設立したことが始まりです。そのため創立からの校風や自主性を非常に重んじています。一方で学校法人は税制優遇や補助金を受けています。近年の不祥事の発生により、経営の透明性の強化を求める声が高まり、文部科学省は学校法人ガバナンス改革会議を設置し、昨年12月に最終報告書を提出しました。その報告書では、学外者のみで構成される評議員会を最高決定機関とし、理事や監事の任命・解任、寄附行為の変更等の決定権を付与するとの内容でした。私学の教育理念を必ずしも理解していない人達が重要事項を決定することにもなりかねず、私学団体が猛反発したのを受け、今年3月に改めて「学校法人制度改革の具体的方策について」という文書が通知され、4月に「私立学校法改正法案骨子案」が公示されました。昨年末の報告書に比べると、私学の独自性に配慮した上で、理事会、評議員会、監事の権限を整理し、業務執行や不正行為等に対して互いに牽制・協働していけるようバランスを考慮した内容となっていますが、まだ多くの議論が必要であり、具体化には時間を要すると思われます。学院では既に山下幸司前常務理事が、理事と評議員の兼任禁止など一部改正を実現されています。今後も動向を注視しながら一歩ずつ着実に改革に取り組んでいきたいと思います。

関東学院 常務理事（法務・労務・内部監査担当）
河村 好彦

慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程
2004年関東学院大学法科大学院に着任
2019年より法学部法学科教授
2022年4月関東学院常務理事就任

関東学院大学剣道部の女子選手2名が全日本学生剣道オープン大会で個人戦W優勝

二段以下の部および三段以上の部で優勝した二人。個人戦連覇と大学最後の団体戦で全国大会を目指します。

ともに個人戦初優勝

昨年12月11日と12日、広島県福山市で開催された「第15回全日本学生剣道オープン大会 女子個人戦」において、関東学院大学剣道部の田北桃愛選手（教育学部）が二段以下の部で、江口琉花選手（国際文化学部）が三段以上の部で優勝しました。この大会は全日本学生剣道連盟に加盟する大学剣道部の部員がエントリーできる個人戦で、大学剣道の主要大会の一つです。二人は当時3年生でした。

二段以下の部で優勝した田北選手は、準決勝まで順調に勝ち進み、決勝も面で1本目を先取。その後、相手選手に面を取られるも、再び面を打ち込んで勝利しました。「2年生の時はコロナ禍で試合ができず、久しぶりの個人戦だったのでとにかく楽しもうと思って臨みました。決勝で面を取られた時は少し焦りましたが、最後は同期の二人で二冠を勝ち取れて嬉しかったです」と笑顔を見せます。

２００人以上が参加した三段以上の部で優勝した江口選手は「初戦で苦戦したことで、かえって気持ちが吹っ切れました」と語ります。準々決勝と準決勝を延長戦で制し迎えた決勝。1本目は小手、2本目は面を打ち優勝を決めました。「前半攻め込まれた部分もありましたが、審判から一度『やめ』が掛かった時に思い切って行こうと思い、最後は〈飛び込み面〉を決めることができました」と振り返ります。

決勝2試合は隣同士の試合場で同時に行われました。田北選手はその時初めて、三段以上の部で江口選手も決勝に進出していることに気づいたのだそうです。「それまで自分の世界に入って集中していたため全く知りませんでした。先に江口選手が優勝を決めたのがわかり、自分も負けていられないと思いました（笑）」。一方の江口選手も「田北選手が一本を取ったのがチラッと見えて（笑）。こうなったら絶対にダブル優勝したい」と思ったそうです。優勝の瞬間まで切磋琢磨した同期の二人。ともに個人戦初優勝での二冠達成でした。

学生最後の大会に向けて

関東学院創設時に創部され、１３０年以上の長い歴史を誇る剣道部。男女ともに団体戦や個人戦で好成績を収め、今後も活躍が期待されます。現在4年生の二人。9月19日に団体戦「関東女子学生剣道優勝大会」に挑み、結果により11月の「全日本女子学生剣道優勝大会」に進出します。昨年は関東大会初戦で全国優勝したチームと対戦して惜しくも敗退、今年は3年ぶりの全国大会出場を目指します。その後は、昨年優勝した個人戦のオープン大会が12月に開催。連覇を目指して今年もエントリーする予定です。悔いのない試合で大学生活を締め括ってほしいと思います。

関東学院大学 剣道部
田北 桃愛（もえ）さん（教育学部こども発達学科４年：写真左）
江口 琉花（るか）さん（国際文化学部英語文化学科４年：写真右）

２歳からクラシックバレエを学び、小６から剣道へ転向した田北桃愛さんは京都府出身。この秋は大会出場や教育実習で多忙な毎日です。5歳で剣道を始めた江口琉花さんは熊本県出身。幼い頃からの夢である警察官を目指し、卒業後も剣道を続ける意向です。

 写真撮影時のみマスクを外しています。

情報活用の教育拠点として学外からも高い評価
関東学院六浦中学校・高等学校 図書館の活動

「情報活用授業コンクール」優秀賞を受賞した聖書科との連携を例に同校図書館の創造的な授業支援や情報リテラシー教育を紹介します。

全教科との協働を実現

学校図書館は、思考力や表現力を培う教育インフラとして、資料やＩＣＴを活用した授業を支援する機能とともに、情報リテラシー(様々な情報を主体的に読み解く能力)を育成する役割を担っています。

学校図書館の活動において、学外から高い評価を得ているのが関東学院六浦中学校・高等学校です。司書教諭と学校司書が常駐し、それぞれの立場から教育活動に関わることで、読書・学習・情報のセンター的存在となっています。司書教諭を務める九渡愛美教諭は次のように語ります。「所蔵が小説に偏ることなく、調べるための蔵書を充実させています。生徒にとっては学年を超えた交流の場でもありますし、教員も毎日多く来館されています。司書教諭として多くの教科と協働してきましたが、今年度ついに全教科と関わることができました」

情報活用授業コンクールに入選

全国学校図書館協議会が主催する「情報活用授業コンクール」は、学校図書館を利用して生徒の主体的・意欲的な学びを深め、情報活用能力を育む授業実践を目指して２０２０年度に創設された事業です。情報やＩＣＴを活用した授業実践を募集し、優れた実践に対して優秀賞を授与しています。六浦中高は２０２０年度に３件の授業実践が優秀賞を受賞するとともに、全国で唯一の「情報活用推進校」に選出されました。また、２０２１年度も１件の授業実践が優秀賞を受賞しています。今回は２年連続で優秀賞を受賞した聖書科の授業について、担当教諭と図書館員にお話をうかがいました。

2020 年度に受賞した地球市民講座

図書館と教科教育での連携実例

優秀賞を受賞したのは、２０２０年度と２０２１年度に聖書科が実施した「留岡幸助」に関する調べ学習です。岡山県出身の留岡幸助はキリスト者であり、日本の社会福祉の先駆者。明治から大正にかけ東京と北海道に家庭学校を設立し、青少年の更生や児童福祉等に尽力しました。そのような奉仕活動をした留岡幸助に関する資料は希少で、収集することが大変でした。学校司書を中心に図書館員が、キリスト教関連の書籍資料が豊富な関東学院大学の図書館に足を運び、資料を収集しました。

「司書教諭は、授業において情報リテラシーに関わる事項をよく生徒に説明します。この聖書科の授業では、Ｗｅｂサイトの信憑性の判断方法や、出典明記の際に資料のどの部分から出典事項を抜き出すかなど、細かく説明しました」と九渡教諭。学校司書は資料収集をし、司書教諭は情報リテラシーについての学習指導、と授業において互いの専門性が発揮されます。

ワークシートは、情報収集した内容をまとめるものが中心ということで、それらの部分は九渡教諭が作成に加わっています。２０２０年度は全て対面授業であったため、授業期間内のワークシートをブック型にして授業初日に生徒に配布しましたが、２０２１年度は、オンラインで授業を行った時期もあり、ワークシートは全て電子版で毎回の授業前に社会情勢や授業形態に合わせながら作成し、生徒の入力が終了した後に印刷をして配布する形になりました。

授業の方式だけでなく、テーマについても２年目には深化がありました。聖書科の髙橋彰教諭にもお話をうかがいました。「１年目は留岡幸助の〈社会事業〉がテーマでしたが、２年目は〈社会奉仕〉に焦点を当てました。関東学院の〈人になれ 奉仕せよ〉という校訓ともつながりますし、キリスト教が彼にどんな影響を与えたのか、キリスト者としての内面を掘り下げることが狙いです。そうなると新たな資料が必要なので、留岡幸助にゆかりのある土地が保管しているアーカイブなども集めて、それをオンラインでどう展開していったらいいかを何度も話し合いました」

教科教員の専門性も発揮されました。今後も新たな要素を加えながら、生徒の主体的な学びを深めたいとのことです。このようにして、図書館が関わる授業は、教科教員と司書教諭と学校司書の３者がそれぞれの専門性を発揮し、協働することによって取り組まれています。

授業で使用したワークブック

学びのコーディネーターとして

今回のような教科との連携について、図書館としての関わり方や狙いを司書教諭の九渡教諭にうかがいました。「教科から提示された学習の狙いを実現するために様々な提案をしますが、図書館としての狙いは、情報リテラシーに関する知識やスキルを生徒が身につけることです。例えば出典をきちんと書く、様々な情報源から信憑性を判断するといった素養を、授業の中で育みたいと考えています。それぞれの狙いを達成するにはどのように授業を展開すべきかを話し合い、それに合わせて学校司書が資料収集や展示を行うことで協働し、生徒への最大の還元を目指しています」

授業と図書館を結んで探究学習を支える司書教諭の存在は、まさに学びのコーディネーターです。学校司書として展示を担当する福澤香野子さんは次のように語ります。

「図書館には展示スペースが多くあり、授業とコラボした展示を頻繁に行っています。飽きない展示を心掛け、書店の展示を参考にしたり、大学図書館の活用もどんどん取り入れています。以前に聖書科がルワンダに関する授業を展開した際は、書籍と一緒にルワンダの人々が作った品物も展示しました。本だけでなく、モノも情報です。図書館の展示を幅広く活用していただけるよう、これからも様々な試みをしていきたいと思います」

今後の新たな取り組み

メディア取材やセミナー、視察の依頼も多い六浦中高の図書館。８月にオンライン開催された「全国学校図書館研究大会」では視察動画が配信されました。今後も先進的な活動が期待されますが、九渡教諭としても新たな取り組みを考えているそうです。「情報リテラシーの育成に関する６年間の体系的なカリキュラムを作り、全教科に派生していく形を構築できればと思っています。今は課題や学齢に応じて単発的に狙いを定めているので、より長いスパンで体系的に進めていきたいですね」と語ります。同校図書館の活動に今後もご注目ください。

関東学院六浦中学校・高等学校
学校司書 福澤 香野子
司書教諭 九渡（くどう） 愛美（めぐみ）

第１回情報活用授業コンクール (2020 年度)　優秀賞３件
中２ 地球市民講座「地球市民の基礎理解 (多文化共生・多文化理解)」
中３ 地球市民講座「地球規模の社会的課題 (SDGs 関連課題) と自分」
高２ 聖書科「留岡幸助の社会事業」
および「情報活用推進校」選出 (全国１校)

第２回情報活用授業コンクール (2021 年度)　優秀賞１件
高２ 聖書科「留岡幸助の社会奉仕」

図書館の展示コーナー

 写真撮影時のみマスクを外しています。

伝統文化とエンターテインメントの融合
横浜で受け継がれる中国獅子舞

華麗でダイナミックな舞いで魅了する中国獅子舞。その伝承に力を注いでいる大学卒業生を訪ねました。

河西航さんは関東学院大学工学部建築学科（現：建築・環境学部）出身の32歳。建築会社を営む一方、母校である横濱中華學院の卒業生で構成される「横濱中華學院 校友會」の会長を務め、中国獅子舞の伝承に尽力されています。演者として活躍し、数年前に第一線を退いて以降は指導者として、次世代の育成に努めています。今回は拠点である横濱中華學院を訪ね、中国獅子舞の見所や活動についてうかがいました。

横濱中華學院 校友會 会長
河西 航 さん
2013年3月 関東学院大学工学部建築学科卒業
中国獅子舞演者
国際コーチ及び国際審判員ライセンス保有者

中華街の祭事を彩る伝統芸能の技と美

想像上の聖獣である獅子の動きを表現した中国獅子舞。「駆邪と降福」の象徴として、古代中国から伝わる神事であり芸能です。その起源は諸説ありますが、清朝の乾隆帝の時代に発展し、現在まで伝わる獅子舞の原形が築かれたそうです。横浜中華街では、美しくアクロバティックな踊りでお祭りやお祝い事を盛り上げ、地元の人々だけでなく、観光客にも愛されています。中国獅子舞は大きく2つの系統に分けられます。

「揚子江を境に、北方と南方に分かれ、見た目や踊り方が異なります。北方獅子は金色の長い毛並みで、より伝統に近く、曲芸的で激しい動きが特徴です。南方獅子は見た目がカラフル。動きはカンフーが基礎になっていて、柔らかくて愛嬌があります。僕らはどちらもやりますが、主に南方獅子を演じています。世界的にも南方獅子が主流となっていますね」

日本では神戸、長崎など各地の中華街で継承されていますが、中でも横浜は最も歴史が古いそうです。

「横浜中華街で獅子舞を行うようになったのは70年ほど前から。この街を築いた華僑が、自分達の故郷の文化を継承したのが始まりです。横濱中華學院では60年以上前から学生が演じるようになり、現在では小学1年生から授業で獅子舞を実践し、学校の伝統文化として根付いています」

日本の獅子舞と比べると、中国獅子舞は華やかな装飾で、目や口、耳などが動いて表情豊か。太鼓やドラ、シンバルなどの打楽器に合わせて、頭部と前足が一人、胴部と後ろ足が一人、二人一組で演じます。美しい動きと愛くるしい表情は、獅子の様々な物語を表現しています。

「山や谷に見立てた鉄柱や台を渡って、餌を食べて喜んだり、酔っ払って寝てしまったり。口を開けて笑ったり、首を傾げて悩んだりなど、表情からも物語が読み取れるので、何をしているのかを考えながら見ても面白いですよ」

時には高さ2・7メートルにも及ぶ鉄柱の上を飛び移っていくなど、危険と隣り合わせのパフォーマンスを披露。見守る観客も手に汗を握ります。

「落下に備えてマットも敷いていますが、打ち所が悪いと大怪我につながります。二人のコンビネーションや技術はもちろん、強い精神力が必要です」

横濱中華學院での練習風景

スポーツ化という世界の新たな潮流

近年は伝統文化の枠を超え、「獅子舞のスポーツ化」が各国で進み、世界大会も開催されています。

「競技としての獅子舞は、台湾や中国、マレーシア、シンガポール、香港、マカオなど華僑のいる国々で盛んで、特にマレーシアやシンガポールでは政府がバックアップして、日本で言うと相撲のような存在です。小学部から授業にも組み込まれており、当校も現在は「伝統文化」という枠で授業化しています。今は欧米や東南アジア諸国など大会参加国が増えていますね」

国際審判員のライセンス保有者でもある河西さんに競技の採点方法を聞きました。

「フィギュアスケートと似ています。表情、構成、技の難易度、礼儀、打楽器とのコンビネーション、演奏者の表情など多くの審査項目について評価します」

河西さん自身、かつて日本代表として強豪国と競い合い、特に大学4年間は演者としてのピークだったそうです。

「2年生と4年生の時、世界大会に出場しました。大会前は練習時間が増え、学業との両立が大変でしたが、勉強面では友達に支えられ、先生方もすごく理解してくださり、多くの方のサポートがあって参加することが出来ました。おかげで一生忘れられない経験ができました」

コロナ禍以降、世界大会は中断していますが、最近はオンライン世界大会も増えているそう。実戦の大会も早ければ来年には再開されるのではと期待しています。

「指導者として若い子達を輝かせることが、僕らの世代の役目。今の夢は、国際審判員の立場で、日本代表である後輩達の演技を見ることです」

エンターテインメントとして魅力を発信していきたい

様々な娯楽にあふれた現代社会において、今後も若者達が獅子舞を楽しみ、継承していくにはどうしたら良いのか。河西さんは今、大きな葛藤を抱えています。

「僕らの獅子舞は横濱中華學院の卒業生しかできない、門外不出の文化です。一方で、日本以外の国々ではスポーツ化して裾野を広げ進化しています。時代に合わせて僕らも開放的に変わるべきかもしれませんが、街や学校の伝統を守ることも大切であり、難しい問題です。この重みを次世代に背負わせないためにも、獅子舞という文化、エンターテインメントをもっと多くの人に知っていただいて、若い世代のやり甲斐につなげていきたいと思っています」

迫力満点の演舞を間近で見て楽しもう！

横浜中華街では、年越しのカウントダウンに始まり、春節（2月）、国際仮装行列（5月）、関帝誕（7月）、国慶節（10月）など、様々な行事に獅子舞が登場します。

「秋の代表的な行事の一つが10月10日の雙十節（双十節）。中華民国の建国記念日です。横濱中華學院では、建て替えたばかりの新校舎の校庭を一般開放して、伝統芸能の披露やパレードを予定しています」

まだまだ語り尽くせぬ中国獅子舞の魅力。躍動感あふれる舞を見に、ぜひ中華街へ足をお運びください。

※各行事は新型コロナウイルスの感染状況によって変更・中止する場合がありますので、横浜中華街のホームページ等で最新情報をご確認ください。

世界大会の様子
これまでの最高順位は10位

パレードでは「龍舞」も見応えたっぷり！

OLIVE-SPIRIT 関東学院学報
KANTO-GAKUIN NEWS No.62 2022.9

お知らせ 関東学院大学 理工学部理工学科に２つの新コースを開設

2023年４月、関東学院大学では理工学部理工学科に「表面工学コース」を新設、
「健康・スポーツ計測コース」を「健康科学・テクノロジーコース」に改組します。

材料の「表面」に加工を施し、本来持ちえない新たな機能を加える「表面工学」は、
自動運転やAIなどのデジタル化が加速するこれからの経済のカギを握るとも言われる技術です。
表面工学コースでは、関東学院大学が「材料・表面工学研究所」で長年培ってきた
表面工学の技術を専門的に学ぶことが出来ます。

Society5.0時代のヘルスケアでは、寿命だけでなく、
健康に日常生活が過ごせる「健康寿命」も延伸させることが基本理念であると謳われています。
健康科学・テクノロジーコースでは、身体と健康についての知識、
コンピュータプログラミングのスキルと統計学的データ処理の知識を学び、「健康科学」と「データ科学」を
融合した「デジタルヘルスケア」の学びを提供します。

関東学院大学理工学部では、医療・通信・エネルギーなど、
今後の人々の生活の基盤となる分野の技術革新に貢献できる人を
育てるため、新たに２コースを開設します。

理工学部
オリジナルサイト

表面工学コース
特設サイト

詳細はQRコードよりご覧ください。

関東学院学報 第62号 2022年9月20日
発行：関東学院 編集：関東学院大学広報課